【特別寄稿】

追悼・青井和夫先生

Memories of Professor Aoi Kazuo

怀念青井和夫教授

若林　敬子

青井和夫先生が、2011年12月21日に老衰にて逝去されました。1920年生まれの91歳でした。

日中社会学会にとりましては、学会創設期当初から学会のために大変に尽力下さり、福武直初代会長についで、第2代会長を務められました。

ここに心よりのご冥福をお祈りして、追悼の意を記させていただきます。

1．青井先生との最後の会見

先生の最晩年2009年5月8日、私は岡山県倉敷市下津井にある、住宅型有料老人ホーム「ヴィラプランタン せとうち」を訪問し、お目にかかりました。どうも、ここを訪問した唯一の社会学を学ぶ者であったようです。

地域社会学会が岡山大学で開催される前々日、翌日の福武直先生の何度目かのお墓参りと合わせて伺いました。ごく近い先生にはご相談致しましたが、ほとんど他言しておらなかったので、今となっては何人かの友から良いことをしたと言われ、私なりにも納得しております。

この介護付きホームは、完成してまだまもない(2005年入居開始、全81室個室)快適なホテル風の施設であり、目前には瀬戸大橋が見える眺望の素晴らしい立地で、レストラン、喫茶コーナー、理髪・美容院なども完備していました。

先生は相変わらずのスマートな容装でさっそうと私の前に現れ、私と解するのに若干の時間を要しましたが、きちんと認知して下さいました。そのことをそばにおいでのホームスタッフの方に指摘され、お久しぶりの再会にとても嬉しく感じたことを覚えております。短時間ながら階上にある個室に案内していただきましたが、原稿用紙と書籍などが机上に置かれており、相変わらずの学者としての意欲たっぷりの雰囲気でした。

2004年頃から療養されていた奥様が、膠原病となられ入退院を繰り返され、老々介護で苦労されたとのことです。その奥様が2008年7月17日に86歳で敗血症でお亡くなりになってから、先生は寂しさも加わってか、急に老いていかれてしまったようです。

1950年30歳で、奥様の節さまと結婚、青井家の養子・養女となられてから半世紀余、素晴らしいご夫婦ぶりでした。私も一度だけお住まいの千葉県柏市のお宅にお邪魔して、心暖まるひとときを過ごしたことがあります。

お子さまがおられなかった先生は、甥（長男・石田康彦さまの次男・健司さま）の次男を養子にもらわれて、柏のお宅には、その若き養子ご夫婦が、先生が岡山にいかれた後お住まいでした。

先生との連絡が途絶えてしまった後、私は柏市在住の青井和夫先生をよく存じあげている旧友に頼んで連絡し、甥の石田康彦さまから情報が入るようになりました。晩年の青井先生は石田さまご家族によって、しっかりとしたサポート体制がとられておりほっとしておりました。今回この追悼文執筆にあたり、写真提供などでもお世話になりました。

2．先生の生い立ちとお人柄

青井先生は1920年1月1日、岡山県玉野市宇野（か

つての児島郡宇野町）の医師・石田敏太氏の三男として誕生。お母さまを幼くして亡くされたとお聞きしました。兄はお二人とも父親の跡を継いで医師となられましたが、青井先生だけは第六高等学校を卒業後、東京大学法学部に進まれ、1941年に卒業されました。政治学科に属されましたが、いかにも青井先生らしく自分は人を裁くことはできないといわれていたそうです。

1942年1月、三井造船株式会社に入社、即翌2月の姫路師団通信隊に入隊、その後戦下の南太平洋赤道直下の離島・ハルマヘラ島に赴き、陸軍通信隊長として極限の生活を体験されました。この頃の軍隊経験については、先生のその後の研究者人生・生き方に大きな影響を与えたと、おりにつけおっしゃっておられました。

ようやく敗戦後の1946年6月に帰国・復員された後、1947年4月、背水の陣をしきつつ、東京大学文学部社会学科に再入学、ここで同郷の六高時代の2年先輩にあたる福武直先生とあわれたこともあり、強い絆のもとに社会学の道をその後歩んでいかれることになりました。

青井先生のお人柄につきましては、東京大学定年退職時につくられた、東京大学社会学研究室内、青井和夫先生退官記念の会『青井和夫先生　人と業績』1980年に多くの関係者らが「青井先生の思い出」をしたためており、かつ最も適格に記されていますので、以下断片的ながら紹介してみましょう。

“温厚な調停役”
“円満で親しみ深い”
“角の立たない円満な人柄”
“怒った顔をみたことがない”
“いつも微笑を含んだ温顔”
“クセがなくバランスのとれた人格”
“研究上のつきあいの間口が広い人で・・・公平無私、しかもよくこまめに学会つきあいをつとめられるから誰からも頼りにされてきた。今日の日本社会学会に人材多しとしても、青井さんほどの学会のまとめ役はそう何人もいないではないか。”

等々であると、衆目の一致するところです。

3．中国との出会い

青井先生の中国との出会いは、1978年10月13～27日、東京大学第2次訪中団の一員として、改革開放に向けて動き出したばかりの中国を訪問されたことに始まります。

第1次が1976年12月14～28日（9月9日毛沢東逝去）、福武直団長のもとに、大内力・隅谷三喜男・玉野井芳郎らの諸先生方でいかれたのに続きます。福武先生にとっては33年ぶりの蘇州訪問でした。（福武直編『現代の中国―東大教授訪中団報告』東京大学出版会，1997年刊行参照）

第2次は理工系教授を主に、青井和夫先生は副団長として、松原治郎・阪本楠彦先生ら13人からの団でした。

この訪中報告について青井先生は『書斎の窓』有斐閣、1979年5・6～80年1月、（№284-290）、東大出版会『UP』1979年8月に「その後の中国―高等教育を中心に」、『季刊社会保障研究』1979年3月に「中国人口」など、勢力的に執筆・紹介されています。

長い暗雲期を経て、牧野巽（たつみ）先生らが「有名な社会人類学者・費孝通氏の近頃の運命はどうなっているのであろうか」（「王同恵著花籃瑤社会組織を読む」早稲田大学社会学会『社会学年誌』第12号1971年（『牧野巽著作集』第7巻，御茶の水書房，1985年，256-7頁に収録）と心配されていました。また、有斐閣の『社会学辞典』1958年では、費の年齢さえもが1910年生まれが、1898年生まれと誤って伝えられていました。そこに突然国連大学京都シンポジウムに出席するため費孝通氏が来日。福武直先生との二者対談が、1978年11月27日「毎日新聞」にて実現するなど、歴史的に意義大な初対面がありました。中国社会および日中間の急速なる劇的大転換がみられかけていたホットな時期でありました。

この時の感触で社会学の復活は近いと思われたといいますが、その復活の実現は1979年3月18日、日本社会学者友好訪中団として26人が北京到着の翌日のことでした。「中国社会学研究会」が60余人の出席で結成され、大変なお喜びとなりました。（福武直編『現代化中国の旅―社会学者訪中団報告』東京大学出版会，1979年11月）

この「中国社会学研究会」の会長は費孝通、副会長は田如康、杜任之、陳道、李正文、羅青、林耀華、雷潔瓊ら7人、顧問は陳翰笙、呉文藻、李景漢、呉沢霖、言心哲、柯象峰、李安宅という、戦前に活躍の実に懐かしい方々が老大家として名をつらねていました。

とりわけ、「広東農村の生産関係と生産力の関係を究明して外国にも知られた陳翰笙、敗戦直後に駐日代表部にいた呉文藻、定県社会概況調査で著名であった李景漢、農村社会学や社会調査法の概況書を書き、農村人口を分析した言心哲、このたび来日中の社会科学院

訪日代表団の一員である呉沢霖など、私（福武）が戦時中、中国農村社会研究のために繙（ひもと）いた懐かしい著者たちがつらねている。この人達はまだ存命なのかと驚いた」と記している。また、費孝通氏との1979年3月の北京会見で印象的な言葉は「君（福武）はもう名誉教授で引退したというが私達は引退しようにもできない。後進が育つまで10年は死のうにも死ねない」と言われたことで、「この言葉は印象的であったと同時にずしりと私の心を重くした」（『現代化中国の旅』196-7頁）とくり返して記されている。

福武先生は、「日中の社会学者の交流を深める中で、少しでもこの再建に役立ちたいと思う。それが、中国農村の調査研究から研究者の道を歩み始めながら、その研究を日本農村の研究のために放棄してしまった私のせめてもの償いと考えるからである」と結ばれた。（「毎日新聞」79年4月9日）

また、「もう年もとったし、勉強を続ける気力もない、だが中国にだけは苦労しても行って研究を続けたい。若い熱心な人達も連れて」と「朝日新聞」のインタビューに答えられている。

こうしたお気持ちが1980年9月の日中社会学会成立と会長をお引き受けになり蔵書を寄贈。さらには1989年3〜4月は、いつ3回目の心筋梗塞におそわれるかもしれないという爆弾をかかえられながらの、4年半ぶりの訪中に顧問として同行されたエネルギーではないでしょうか。

こうした新たな日中の動向を背景にして、福武直先生は、中国社会科学院の建物完成をまって、1984年に4000冊余の邦文（一部英文も含め）社会学関係の蔵書を、日本語文献の不足に悩んでいた中国社会科学院社会学研究所に寄贈されました。

今日とちがい、当時段ボール箱に詰め込まれた大量の書籍が、無事に天津港に船上げされ、北京の社会科学院まで、間違いなく到着したか否かは、かなり気をもまれる（63箱中の2箱が未着か）等々で心配事でした。

ようやくにして、それから約数年後の1989年3月、第3次訪中国として、青井団長のもと福武直先生は顧問として参加され、北京・天津・上海・蘇州の旅を楽しまれました。

その旅のハイライトは、中国社会科学院社会学研究所を訪問した時でした。その第1は、福武先生に「名誉教授」の称号授与式がなされたこと。第2は寄贈されていた既述した蔵書の「福武直文庫」の開幕式でした。

福武先生はその時「自分はもうこれでいつ死んでもよい」といって、この上なくお喜びの笑顔をされたことを今も忘れることができません。

写真上は、1989年3月　福武文庫前、左より何建章、青井和夫、福武直、柿崎京一、陸学芸らの先生方。

写真下は、1987年3月　費孝通と福武直　費孝通宅にて。

（2枚ともに若林敬子撮影）

それから帰国して3カ月後の6月4日、天安門事件が勃発、奇しくも日中社会学会の第1回の日にあたっていました。あの時の沈痛極まりなかったこと。それから1カ月近くたった7月2日、福武先生は3度目の心筋梗塞で急逝されました。その訃報は、青井先生ばかりでなく、私達日中社会学会の全会員らにとり青天

の霹靂でありました。(青井和夫「初期の福武社会学―理論社会学から農村社会学へ」日中社会学会編『日中社会学会会報』福武直追悼号〈第4号〉1990年6月，8-14頁)

4．日中社会学会の設立と日中共同調査

日中社会学会は、1980年9月15日、日本社会学会北海道大学にて開催された当日、学会設立の発起人と賛同者らが集まり設立されました。この設立会議に青井先生も出席され、発起人、副会長の役割を当初から担われ、福武会長をサポートされました。

この学会発足から約10年間程は、学術団体というよりは、中国に関心をもつ社会学者らの親睦団体・交流団体といった感の強い仲間グループでした。

中国で1950年代半ばから、長い間禁域とされてきた大学からも、その学がブルジュア学として批判され、消却されてしまっており（人口研究も同様)、それが30年ぶりに再生されていく過程であり、まだ学術交流に耐えうる業績もない時期でありましたが、そうしたことすべてを承知の上で、今後の活動に期待してあえて学会新設ということになりました。

当初は費孝通・雷潔瓊・袁方先生らの大先達が、戦前・1930年代のコミュニティ研究の復活、新たな社会保障、社会工作、年金など日本の社会福祉への関心等々が強くもたれ、手探りながら日中交流が始まりました。

この頃の中国社会学の主要テーマは、以下の4点に整理されましょう。

1）人口問題・老齢問題・社会福祉
2）家族・婚姻・婦女問題
3）農村と郷鎮企業問題
4）社会変動と階級・階層

(根橋正一「青井先生と中国研究」流通経済大学『社会学部論叢』vol. 23, №2〈通巻46〉，2013年3月，186頁)

さて青井先生は、1987年10月、福武直初代会長の後を引き継がれ、第2代会長に就任下さいました。その後、1999年6月、ちょうど設立20周年をむかえ、第3代の宮城宏先生にバトンタッチされるまでの12年間もの長い間、会長としてご尽力下さいました。

具体的には、1987年の就任にあたり、先生は以下の3点を当面の目標とされ、その後着実に実現されました。

1）事務局を整備し、定期研究会と年次大会の開催。
2）学会機関誌の内容を充実して発行。
3）会員数の増加により、日本学術会議の「登録学術研究団体」として登録申請・強化の必要。(この当時100名を目標としたが、1997年には120名となり、98年の大会から役員は任期制となる。なお、2013年8月現在226名)

こうして1988年6月には『日中社会学会会報』が創刊され始め、それを1992年6月に5号でうちきり、1993年より会報を『日中社会学研究』と一段階昇格させ、本格的な学術機関誌らしくして、年会費の中に機関誌代も含め、英文名も“Japan-China Journal of Sociological Studies”とし、年1回の発行にこぎつけました。(1999年6月第7号まで)

1980年9月の学会発足後の、訪中団の結成については、第1次は1982年3月28日～4月4日、(1984年4月29日～5月7日は社会福祉学者訪中団が入り)、第2次は1987年3月21日～4月4日、第3次は1989年3月23日～4月6日と続きました。

その後は、各自の研究テーマにそっての、団ではない訪中のスタイルとなりました。(青井和夫「『日中社会学研究』の発刊にあたって」『日中社会学会』創刊号1993年6月，1頁、青井和夫「1997年の新春にあたって」『日中社会学研究』第5号，1997年6月，1-2頁)

また青井先生の日中社会学会会長としてのお仕事の一つは、「中国都市・農村の社会変動に関する実証的研究」と題した、1991～93年度文部省科研費（国際学術研究）による日中共同調査の実施でした。

その成果は、青井和夫編『中国の産業化と地域生活』東京大学出版会、1996年2月刊行としてまとめられています。

日本側メンバーは、青井先生の外、柿崎京一、吉沢四郎、安原茂、根橋正一、中村則弘、木下英司、池岡義孝の計8人。中国側は、中国社会科学院社会学研究所の陸学芸所長、張厚義、王頡。上海社会科学院社会学研究所の丁水木所長、徐安琪、田暁紅の計6人でありました。

調査対象地は、都市は上海市の楊浦区四平街道、黄浦区濰坊新村街道など4地点で計400サンプルの調査を実施。他方、農村は山東省莱蕪市（省都の済南市から西南に車で4時間）の鹿野郷房幹村と城区孟花園村の2か所でした。

こうした青井先生をリーダーとするご努力によって日中共同調査の成果が実を結び、日中社会学会も内実

のある段階へと飛躍していったと思います。

5．研究分野の展開と成果

青井先生の研究分野は、以下の6つの分野に分けられるのではないかと私的に思いますが、広義には、家族研究に集約できるでしょう。

1）小集団研究
2）地域開発と住民生活＝社会開発論
3）生活構造論、福祉
4）世代・親子の家族社会研究
5）長寿社会論、100歳以上老人
6）中国との交流・共同研究

まず先生の社会学初期は「軍隊での極限状況で小部隊を統率した体験が、彼を小集団研究に向かわせた一要因ではなかったか」とは、森岡清美氏の指摘です。（「追悼、青井和夫先生」『日本家族社会学会ニュース』No.49，2012年11月）

青井先生自らも「社会学科に入学してからの関心は、小集団研究を専攻しはじめ、実験的小集団や学習集団やサークルの研究に関心をもち、次第に臨床的な小集団にも注目するようになるが、人為的一時的な小集団だけでは満足できず、それらと比較するために、自然的・永続的な小集団に接近しようとして、家族研究に足をふみいれた」（青井著『家族とは何か』講談社，現代新書，1974年　140-141，201頁）といわれています。『小集団―社会技術とその問題』誠信書房1959年をまとめられた後、このテーマはその後にも熟成されて『小集団の社会学―深層・理論への展開』東京大学出版会、1980年に完成・実を結ばれる。

先生は1953年に東京学芸大学、1961年に東京大学へと職を転じられる過程で、次第に研究分野を教育・青年・コミュニティ・社会開発・生活構造へと、さらには80年代に入ってからは、世代・親子・ライフスタイル・福祉・高齢者・長寿社会論へと幅を広げ、家族研究を深化されていかれました。

福武直編『地域開発の構想と現実』東京大学出版会，1965年では、その第3分冊・付論に「社会開発論の構想」を独自に実証的視点から執筆され、地域住民の生活・運動論を力強く展開されています。

また『生活構造の理論』有斐閣，1971年は、松原治郎・副田義也先生らとの3人の編としてまとめられて社会学の世界で高い評価をえられておられます。

こうしたご活躍の背景には、福武直大先輩との実証的共同の地域開発調査、さらには松原治郎先生とは小田急線相模原の公団住宅で6年間も隣の棟同志で暮らされたという公私共の強い絆の存在などがありましたでしょう。中国への東大第2次訪中団のメンバーとして桂林の漓江下りを共に楽しまれたことなど、私・若林は大学院生であった頃によく耳に聞いた話でありました。

1955年に小山隆先生を中心に結成された「家族問題研究会」には、当初から積極的に参加され、会長や顧問も引き受けられました。

1968年発足の家族社会学セミナー（今日の「日本家族社会学会」）には、常に森岡清美・松原治郎先生らと会の発足と運営に尽力・貢献されていたことを日常的に院生時代目前にしております。1995年には、この日本家族社会学会の顧問に推挙されておられます。

「家族とライフコースに関する日米共同研究」のために、ホノルルの会議にも参加されたのは1984年のことで、87年の第4回アジア社会学会議の開催など、研究を国際的グローバルに大成・蓄積されていかれました。1982年～85年までは、日本社会学会々長の重責を務められ、学会の発展に貢献してくださいました。

こうした研究に平行して、厚生省人口問題研究所（審議会）や社会保障研究所の専門委員などの役職につかれて、政策的にも最先端をリードされていかれました。

さらに青井先生は、東大定年後勤務された津田塾大学国際関係学科では、津田塾の卒業生調査を行い『高学歴女性のライフコース』勁草書房，1988年をまとめられました。

ついで流通経済大学社会学部では『長寿社会を生きる―世代間交流の創造』有斐閣，1999年をまとめられ、「世代間交流研究所」顧問など各々の大学への貢献に努力されました。

私事ですが、筆者・若林は、先生からの依頼により、津田塾大学では1986年度「比較社会論」（中国と日本の人口問題からみた比較）、流通経済大学では1990・91年度「人口論」（中国と日本の人口問題）を講義にでかけ、毎週先生とお会いすることを楽しみにしておりました。

ご自分のことを表にださず、公平無私で、日本社会学会なかでも日中社会学会のために全力で尽力下さいました。青井先生に対しまして、心からの深い悲しみを胸に、哀悼の意を表したく存じます。安らかにお休みくださいますように。

なお青井先生のお墓は、岡山県玉野市宇野の円明院の中におねむりとのことです。

［履歴と主な著作目録］

1953.4　東京学芸大学教育学部助教授
1961.10　東京大学文学部助教授
1970.4　〃　教授
1980.4　〃　定年退職、名誉教授
1980.4.2　津田塾大学学芸学部国際関係学科教授
1988.3　〃　定年退職
1988.4　流通経済大学社会学部教授
1994.4　〃　定年退職、名誉教授

日本社会学会　会長（1982.10～85.11）・理事・評議員・顧問
日本教育社会学会　評議員・理事（1958.4～65.9）
家族問題研究会　会長（1980.4～83.4）・顧問
関東社会学会　会長（1987.6～91.6）
日本家族社会学会　理事・顧問
日中社会学会　会長（1987.10～98.6）
厚生省人口問題審議会　専門委員（1962.9～81.4）・評議員（1982.8～86.3）
社会保障研究所　専門委員・非常勤研究員など
地域社会研究所　評議員・理事
学術審議会（科研費分科会）　専門委員（1978.2～80.1）
文部省大学設置審議会　専門委員（1979.6～85.3）
青少年問題審議会　委員（1982.11～84.11）
厚生省社会福祉審議会　委員（1989.11～95.12）・委員長（1990.3～95.12）

ミネソタ大学留学（1966.7～67.9）
国際老年学会議（1972.6）、国際社会学会大会（1974.3）、国際老年学会議（1975.6）、老年問題国際会議、「家族とライフコース日米会議」、アジア社会学会議（1987.12）など多数出席。中国史跡研修旅行で中国訪問（1982.12～83.1）

賞罰：1995.11　叙勲にて勲三等旭日中綬章受章

〈主な著作〉

〔単著〕

『小集団―社会技術とその問題点』誠信書房，1959年.
『家族とは何か』講談社現代新書，講談社，1974年.
「小集団の社会学―真相理論への展開」東京大学出版会，1980年.
『社会学原理』サイエンス社，1987年.
『長寿社会論』流通経済大学出版会，1992年.
『長寿社会を生きる―世代間交流の創造』有斐閣，1999年.

〔編著〕

『組織の社会学』現代社会学講座第3巻，有斐閣，1964年.
『理論社会学』社会学講座1，東京大学出版会，1974年.
『高学歴女性のライフコース―津田塾大学出身者の世代間比較』勁草書房，1988年.
『中国の産業化と地域生活』東京大学出版会，1996年.

〔共編著〕

『生活構造の理論』松原治郎・副田義也と，有斐閣，1971年.
『集団と社会心理』尾高邦雄教授還暦記念論文集Ⅲ，福武直と，中央公論社，1972年.
『家族変動の社会学』増田光吉と，培風館，1973年.
『家族と地域の社会学』庄司興吉と，東京大学出版会，1980年.
『福祉と計画の社会学』直井優と，東京大学出版会，1980年.
『健康農村活動と地域社会―羽生市千代田地区』宮坂忠夫と，東京大学出版会，1982年.
『中高年齢層の職業と生活―定年退職を中心として』和田修一と，東京大学出版会，1983年.
『日本教育の力学』新堀通也と，有信堂，1983年.
『高齢社会の構造と課題』編集代表・福武直「21世紀高齢社会への対応」（全3巻）第1巻，日本生命財団，1985年.
『ライフコースと世代―現代家族論再考』森岡清美と，垣内出版，1985年.
『現代市民社会とアイデンティティ―21世紀の市民社会と共同性：理論と展望』高橋徹・庄司興吉と，梓出版社，1998年.
『福祉社会の家族と共同意識―21世紀の市民社会と共同性：実践への指針』高橋徹・庄司興吉と，梓出版社，1998年.
『市民性の変容と地域・社会問題―21世紀の市民社会と共同性：国際化と内面化』高橋徹・庄司興吉と，梓出版社，1999年.

〔共著（単行本）〕

『社会と個人』福武直と，新教育事業協会，1950 年.

『地域診断の理論と実際』小倉学・柏熊岬二・勝沼晴雄・宮坂忠夫と，績文堂，1959 年.

『集団・組織・リーダーシップ』綿貫穣治・大橋幸と，今日の社会心理学第 3 巻，培風館，1962 年.

『コミュニティ・アプローチの理論と技法』小倉学・柏熊岬二・宮坂忠夫と，績文堂，1963 年.

（『青井先生、年譜並びに著作目録』流通経済大学 2000 年より、代表的な一部を引用した。

また、直井道子「訃報―青井和夫先生」、『日本社会学会ニュース』. No206，2012 年 8 月 30 日も参照のこと。）

付記：本追悼文の執筆にあたり、以下の 3 拙稿を参照した。戦前 1930 年代～1979 年に至る中国社会学、およびわが国の満鉄調査等についてより詳細に書き直そうかと考えたが、追悼の主旨、枚数の問題もありここでは割愛する。

1．若林敬子「福武直先生の中国とのかかわり」日中社会学会編『日中社会学会会報』福武直追悼号〈第 4 号〉1990 年，22-33 頁

2．若林敬子著『現代中国の人口問題と社会変動』新曜社 1996 年，第 14 章中国人口・社会学の現況と文献，443-463 頁

3．若林敬子・聶海松『中国人口問題の年譜と統計；1949～2012 年』御茶の水書房，2012 年には人口とあわせ中国社会学の動向を並び含めて作成している。

なお、本稿完成後の 2013 年 8 月 14 日、北京の中国社会科学院社会学研究所を訪問、李培林所長（5 月より副院長）と会見、陸学芸前所長の 5 月 13 日の急逝について心よりの哀悼の意を表した。日中の両リーダーの逝去に遭遇し、今後の若き会員の活躍成長に期待したい。

（WAKABAYASHI, Keiko／東京農工大学名誉教授）